白居易茶詩にある文人茶のスタイルと中国の飲茶文化：邸宅での「一碗茶」から見えるもの

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 大阪市立大学中国文学会
	公開日: 2019-02-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 馮, 艶
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20200323-001

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	白居易茶詩にある文人茶のスタイルと中国の飲茶文化 ： 邸宅での「一碗茶」から見えるもの
Author	馮, 艶
Citation	中国学志. 33 巻, p.v1-v32.
Issue Date	2018-12-20
ISSN	0913-3151
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学中国文学会
Description	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

白居易茶詩にある文人茶のスタイルと中国の飲茶文化[1]

――邸宅での「一碗茶」から見えるもの――

馮　艶

はじめに

茶を飲む行為は、その意義から見て、下位から上位へ三つの段階があると言えよう。一は喉の渇きを癒し、健康に良いものを体に取り入れることである。二は茶というものを、あるいは飲茶という行為自体を楽しむことである。「闘茶」や今の中国の「茶芸」はこれに属するだろう。三は飲茶の思想性、つまり飲茶の社会的な意義を追求することである。この点については、とくに中唐以後の飲茶を詠う茶詩に観察することができる。飲茶は仏教や道教と密接に関わっており、文人たちは道士や寺の僧侶との交遊を通じて、飲茶のもつ意義を深めた。

茶を詠う詩は茶詩と呼ばれて研究されており、初唐から晩唐まで約六百首あまりある。個々の詩人の茶詩は、白居易の約七十首が群を抜いており、皎然や姚合、貫休、齊己の十首から二十首がそれに続く。

白居易の茶詩は数が多いだけではなく、内容も茶の贈答を通して友情を詠うものや、愛飲している名茶を詠うものなど様々で、友人を呼んで茶を飲む場面や交遊のある僧侶を茶でもてなす場面、一人で長い夏の昼に茶を飲みながら過ごす場面など、飲茶の風景も豊かである。飲茶は道教の色合いを帯び、また禅的な静寂も持っていたが、白居易は飲茶の

世界を新しい舞台と新しい道具の設定によって一新し、日常の飲茶を描き、飲茶文化により膨らみのある内容を与え、その裾野を広げた。本稿は白居易の茶詩がもつ特徴二点――日常性と多様性――を取り上げて論を進める。

なお、拙稿「白居易の茶詩に登場する茶と酒」[2]は、それまでの白居易の茶詩の隠逸精神や閑適要素を指摘した論文を踏まえ、白詩をにおける飲酒と飲茶の結合表現を主材料として、白居易の茶詩の日常性と多様性を論じたが、本稿はそれをさらに他の茶詩表現にも広げて、論を深めるものである。

一、盧仝の「七碗茶」と白居易の「一碗茶」

（1）「茶経」の五杯茶

白居易が生まれた年（七七二）より十年早く、世界初と言われている茶の聖典『茶経』が陸羽によって完成された。『新唐書』巻百九十六の「陸羽伝」に次のように記載される。

羽嗜茶、著経三篇、言茶之原、之法、之具尤備。天下益知飲茶也。時鬻茶者至陶羽形。置塲突間祀為茶神（陸羽茶を嗜む、経三篇著す、茶之原、茶之法、茶之具を言ふ尤備たり、天下飲茶を益々知るなり、時鬻茶者陶羽形を至す、塲突間に置く、茶神なるを祀る）。

当時は陸羽の名前が広く知られ、『茶経』も飲茶の指南役を果たしていたことが推測できよう。『茶経』の誕生は茶文

化を確立させ、さらにその発展の促進に大きく寄与した。

そして、茶の飲み方について、『茶経』の「五之煮」に、「凡煮水一升、酌分五眼、乗熱連飲之」とあり、また「六の飲」にも、「夫珍鮮馥烈者、其盌數三、次之者、盌數五」と見える。『茶経』で述べられている茶はほとんど茶餅を炙って、それから粉になるように挽いて使われるものである。当時の飲茶方法がすべてこのようにしていたとは限らないが、茶を愛し正しく茶を飲もうと思っている人達は『茶経』の点て方に従い、この飲茶方法を実行していたであろう。

（2）皎然の「三飲」と盧仝の「七碗」

陸羽と密接な交遊を持ち、陸羽の茶思想に対して深い理解を示した人に皎然がいる。陸羽が呉興（今の湖州）に居住する時、皎然は「訪陸羽処士不遇」（『全唐詩』巻八一六）や「九日與陸処士羽飲茶」（『全』八一七）などの詩を作った。茶を飲む時、どういう状況で飲んでいたかがわかる詩は次の「飲茶歌誚崔石使君（茶を飲む歌　崔石使君をからかう）」（『全』八二一）である。全文引用する。

越人遺我剡溪茗　　越人我に剡溪の茗を遺る
采得金芽爨金鼎　　金芽を采り得て金鼎に爨（や）く（または「爨（さん）す」）
素瓷雪色縹沫香　　素瓷雪色　縹沫香り
何似諸仙瓊蕊漿　　何ぞ似たる　諸仙瓊蕊の漿に
一飲滌昏寐　　一飲　昏寐を滌（あら）い

情來朗爽滿天地　情来たりて朗爽 天地に満つ
再飲清我神　再飲 我が神を清む
忽如飛雨灑輕塵　忽ちにして飛雨の軽塵に灑(そそ)ぐが如し
三飲便得道　三飲 便ち道を得(う)
何須苦心破煩惱　何ぞ須いん苦心して煩惱を破るを
此物清高世莫知　此の物 清高 世知る莫し
世人飲酒多自欺　世人 飲酒するに 多く自ら欺く
愁看畢卓甕間夜　愁いて看る 畢卓甕間の夜
笑向陶潛籬下時　笑いて向かう 陶潛籬下の時
崔侯啜之意不已　崔侯 之れを啜りて 意已まず
狂歌一曲驚人耳　狂歌 一曲 人の耳を驚かす
孰知茶道全爾真　孰か知らん 茶道 全爾に真なるを
惟有丹丘得如此　惟だ丹丘有るのみ 此くの如きを得

越の人が剡渓の名茶を賜ってくれ、貴重な新芽を摘んで黄金色の釜で煎じる。雪のように白い磁器に淡青色の泡が香り、なんと仙人が飲んでいる仙露に似ていることだろう。

一杯飲めば眠気を飛ばし、爽やかな気分が天地に満ちる。二杯目は心を洗い、忽ち雨が塵埃を洗い落すようだ。三杯飲めば道を会得し、苦心して俗世の煩悩を忘れようとしなくてもよくなる。

茶の気高さは知られていない。世の人々は酒を飲んで自分を欺いてばかりいる。畢卓が夜に酒甕の間いったことを憂わしく思い、陶潜が庭先で空しく過ごすのを笑う。崔さんは茶を飲んだだけでは気が済まず、高らかに一曲を歌い、人々を驚かした。誰が茶の道がすべて真であることを知っているだろうか、ただ丹丘の仙人だけがそれを理解している。

この詩はまず茶の色や味、香りが具体的に描かれ、その美が文学的に詠われている。文中にある「金芽」や「金鼎」は「金」を重ねて使い、新茶のきれいな色とともに貴重さも強調されている。また茶を「瓊蕊漿」に喩えられている。「瓊蕊」は伝説の瓊樹の花の蕊で、『漢書』巻五七下「司馬相如伝」下に引く「大人賦」の中に「芝英を咀噍し、瓊華を嚥(くら)う」という句があり、魏の張揖の注釈には「瓊樹は昆侖の西流沙濱に生え、大なること三百囲、高さ万仞。華は蕊なり。之れを食らえば長生す」と記している。この喩えは茶が仙界の玉露に匹敵するという作者の認識を示している。

次に注目すべきものは「一飲」、「再飲」、「三飲」の排列である。これは喫茶の境地の深まりを、茶の杯数でわかりやすく示している。一杯目は眠さを追い払う。これは生理的なレベルである。二杯目は鬱とした気分を消えさせ、心が爽やかになる。これは精神的なレベルである。三杯目は道を得て、生きる煩悩をすべてなくし、俗世を超越する境地に到達する。これは哲学的なレベルである。

『茶経』の規範としている飲み方は、一回湯を沸かせば、三杯か五杯の茶が入れられ、それを数人或いは一人で飲む、というものである。皎然の詩中の「一飲」、「再飲」、「三飲」はおそらくは詩人が一人で飲んでいる状況であろう。飲む杯数を重ねていくにつれ、身体が軽くなり、俗世を超越する境地までに達した。

皎然と同じよう様に茶の杯数を重ねる飲み方を詠う詩人がいる。同時代の盧仝である。彼の「走筆謝孟諫議寄新茶」(筆

を走らせて諫議大夫孟殿が新茶を届けてくれたのに感謝する）」（『全』三八八）は、茶の一杯目から七杯目までの飲み方が描写される点に特徴がある。長い詩なので、当該部分のみ挙げる。

柴門反關無俗客、紗帽籠頭自煎喫　　柴門反って關して俗客なし、紗帽　籠頭　自ら煎吃す
（中略）
一碗喉吻潤、兩碗破孤悶　　一碗喉吻うるおう、兩碗孤悶を破す
三碗搜枯腸、唯有文字五千卷　　三碗枯腸をさぐる、唯だ有り文字五千卷
四碗發輕汗、平生不平事、盡向毛孔散　　四碗輕汗を發す、平生　平事ならず、盡々く毛孔に向かって散る
五碗肌骨清、六碗通仙靈　　五碗肌骨清し、六碗仙靈に通ず
七碗吃不得也、唯覺兩腋習習清風生　　七碗吃するを得ざるなり、唯だ覺ゆ　兩腋　習習として清風生ずるを
蓬萊山、在何處。玉川子、乘此清風欲歸去　　蓬萊山、何処にか在る。玉川子　此の清風に乘じて歸り去かんと欲す
（後略）

柴の扉を閉めれば、俗人の客は来ない。紗の帽子をかぶり、一人で茶を煎じて飲むことにする……一杯目は口や喉を潤し、二杯目は悶々とした気持ちを追い払う。

三杯目は痩せ枯れた腸に入り余計なものを削り落し、ただ五千巻の文章が残される。四杯目は軽く汗を催し、普段の鬱憤は毛孔から発散した。五杯目は体の隅々まで清め、六杯目は仙人の境界に通じるようになった。

七杯目はもう飲んではいけない、両腋の下から涼しい風が吹き上がるのを感じた。仙山の蓬莱は、何処にある。

この玉川子は清らかな風に乗り、そこに帰ってしまいたい。

一杯目から七杯目までを排列する書き方は皎然の「一飲」「再飲」「三飲」を発展させたものであろう。一杯目から五杯目までの茶は身体を軽くし、胸の塞ぎを取り除いた。そして六杯目と七杯目を飲むと仙人の境地に達し、両腋の下から清風が吹き、蓬莱の仙山に飛んで行きそうな感覚になるという。この詩は後世の茶詩の中で、「七碗茶」や「両腋清風」などの表現がたびたび借りられるもとになった。たとえば、李彌遜の「復用前韻（また前の詩の韻を使う）」（『全宋詩』巻一七一五）の中で「睡起茶甌風兩腋、功名何啻等浮雲（寝起きで茶を飲めば腋から清風を吹き始め、功名などは浮雲のように軽くなんとも思わなくなった）」また梅堯臣の「嘗茶和公儀（茶を味わいて公儀に和す）」（『全宋詩』巻二五八）は「莫夸李白仙人掌、且作盧仝走筆章。亦欲清風生兩腋、從教吹去月輪傍（李白の仙人掌の茶を自慢しないで、とりあえず盧仝のように飲茶の詩を作ろう。両腋の下から涼しい風吹いてほしいよ、風に月まで連れていってもらいたい）」などがある。李白の「山中與幽人對酌」に（両人対酌して山花開く、一杯一杯復た一杯）と詠い、酒を重ねて酔っていくが、皎然や盧仝の場合は一気に何杯もの茶を飲むことによって現実の世界を超越し、俗世の束縛から解放される快感を求めていた。

以上の皎然と盧仝の詩の特徴は茶杯の数を示して、それに応じた効果を描いたことである。一杯から三杯まで、或は一杯から七杯まで杯数を重ねることによって、茶のもつ仙薬のイメージ、或は脱俗のイメージを用いる精神的な飛躍を遂げた。茶は終始主役を務め、飲茶から得た主観的な感覚と想像を描いたのである。

（3）白居易の「一碗茶」

白居易の約七十首の茶詩で、「茶」字の前に数量詞のあるものは十五首ある。使われる量詞は「碗」、「甌」、「盞」があり、数詞は「一」、「両」がほとんどである。「一」と「両」は少なさを表し、現代中国語の中でもよく使われているので、「両」も「一」の意味と同じように使われているとみていいだろう。白居易の茶詩の数詞のほとんどが、「一」「両」であることは、実は彼の茶詩の特徴を端的に体現している。以下、この十五首を簡単に分類して考察する。

（一）読書・詩作と並列して描く「一碗茶」。全部で五首ある。対句のみ抜粋する。

① 或飲一甌茗、或吟両句詩。（或は一甌の茗を飲み、或は両句の詩を吟ず）[3]「首夏病間」〔〇三二八〕[4]

② 或吟詩一章、或飲茶一甌。（或は詩の一章を吟じ、或は茶の一甌を飲む）「詠意」〔〇二九八〕

③ 或飲茶一盞、或吟詩一章。（或は茶の一盞を飲み、或は詩の一章を吟ず）「偶作二首」〔二二八三〕

④ 起嘗一甌茗、行讀一卷書。（起きては一甌の茗を嘗め、行いては一巻の書を讀む）「官舎」〔〇三六三〕

⑤ 夜茶一兩杓、秋吟三數聲。（夜茶一両杓、秋吟三數聲）「立秋夕有懐夢得」〔二九六五〕

「或……或……」という句作りは三例ある。読書・詩作と飲茶が並列され、同時進行ではなく、しばらく一方に集中していることを示す。つまり、飲茶も読書・詩作も同じよう様にある程度の時間をかけている。飲んだ茶は一杯のみではないはずである。では、読書・詩作と飲茶の環境を「官舎」〔〇三六三〕を通してもう少し詳しく覗いてみよう。

高樹換新葉、陰陰覆地隅　高樹新葉を換え、陰陰として地隅を覆ふ
何言太守宅、有似幽人居　何ぞ太守の宅と言はん、幽人の居に似たるあり
太守臥其下、閑慵兩有余　太守其の下に臥し、閑慵両ながら余りあり
起嘗一甌茗、行讀一卷書　起きては一甌の茗を嘗め、行いては一巻の書を讀む
早梅結青實、殘櫻落紅珠　早梅青實を結び、残櫻紅珠を落とす
稚女弄庭果、嬉戲牽人裾　稚女庭果を弄し、嬉戲して人の裾を牽く
是日晚彌靜、巢禽下相呼　是日晩れて彌彌静なり、巣禽下り相呼ぶ
嘖嘖護兒鵲、啞啞母子烏　嘖嘖たり護児の鵲、唖唖たり母子の烏
豈唯雲鳥爾、吾亦引吾雛　豈唯鳥のみと云はんや、吾亦吾が雛を引く

高い木の葉は新緑になり、鬱々として庭の一隅を陰で覆う。太守の邸宅というよりも、隠者の住まいに似つかわしいものがある。太守は木の下で横たわり、暇を持って余り、くつろいでいる。起きて茶を一杯飲み、行いとして一巻の書物を読む。

早い梅は青い実を結び、木に残ったさくらんぼの赤い珠は庭に落ちている。幼い娘は庭の木の実で遊び、大人と戯れて服の裾を引っ張る。

このような日は夕方になると一層静かになり、巣にいる鳥は下にいる仲間を呼ぶ。サクサクと鳴くのは子を護るカササギの親鳥、アアと鳴くのはカラスの母子。それは空を飛んでいる鳥だけではなく、わたしも小さい子供を引いている。(5)

官舎の庭に、青々と茂っている木、庭に地面に落ちている赤い木の実がある。それに鳥のさえずりも幼い子どもの笑い声もある。「幽人居」と言われているこの場所に詩人がくつろいでいる。そこで日常的に行われているのが読書と飲茶なのである。

読書は目的があるわけでもなく、お気に入りの一冊を選び、楽しんでいる。「窮則独善其身」の観点からみると、読書は自分の修養に努めることであり、常に毎日行う行為である。そして、並列して描かれている飲茶はやはり読書と同じよう様に日課とも言える日常の一部であろう。当時の飲茶は煩雑な手順のあるものであり、気軽に一杯だけ飲む状況ではなかった。茶餅を炙り、挽く。釜を設置して水を汲む。沸かした後やっと茶が出来上がる。『茶経』の指南にあるように三杯か五杯を温かいうちに一気に飲んでしまう必要もあるが、白居易は敢えて「或飲茶一盞」、つまり「一碗茶」を飲むという表現を使い、飲茶の詳しい過程をぼやかしている。皎然や盧仝が杯数を重なることによって精神的に陶酔する境地や現実を超越できる世界を求めているが、白居易は違っていた。しかし、飲茶の仏教的道教的な脱俗のイメージによって、白居易の飲茶も現実の社会との完全な対峙を避けながらも茶の清らかなイメージを借り、自分の価値観を守ろうとしている。

（二）については三つの状況に分けて考えることができる。まず一つ目は、睡眠、酒、食事と対にして描く「一碗茶」である。以下、対句のみを抜粋する。

① 食罷一覺睡、起來兩甌茶。（食罷んで一たび睡より覚め、起き来れば両甌の茶あり）「食後」〔〇三一一〕

② 春風小榼三升酒、寒食深爐一碗茶。（春風小榼三升の酒、寒食深爐一碗の茶）「自題新居止因招楊郎中小飲」〔二六四九〕

③ 游罷睡一覺、覺來茶一甌。（游罷んで一たび睡より覚め、覚めて来れば一甌の茶）「何處堪避暑」〔三〇三六〕
④ 桃根知酒渇、晩送一甌茶。（桃根酒渇を知り、晩に送る一甌の茶）「營閑事」〔三一一六〕
⑤ 藥銷日晏三匙飯、酒渇春深一碗茶。（藥銷し日は晏けぬ三匙の飯、酒渇し春深し一碗の茶）「早服雲母散」〔三一三〇〕
⑥ 醉對數叢紅芍藥、渇嘗一碗綠昌明。（酔うては數叢の紅芍藥に対し、渇しては一盌の緑昌明を嘗む）「春盡日」〔三五八一〕
⑦ 盡日一餐茶兩碗、更無所要到明朝。（盡日一餐茶兩碗、更に要むる所なくして明朝に到る）「閑眠」〔三六三五〕
⑧ 命師相伴食、齋罷一甌茶。（師に命じて相伴食せしめ、齋し罷めて一甌の茶）「招韜光禪師」〔三七〇八〕

まず、寝起きの飲茶からみてみよう。①の「食罷一覺睡、起來兩甌茶。」、③の「游罷睡一覺、覺來茶一甌。」の二例には共通点があり、それは睡眠の数量詞である。埋田重夫氏は白居易と睡眠の関係については次のように指摘する。

安眠は白氏の閑適世界を成立させる基本的中心営為として、何度も何度も叙述されている。「眠」を中心にして、「食」、「酒」、「茶」、「蓮」、「鶴」、「談笑」、「散歩」、「観花」、「泛舟」……といった個々の価値が同心圓状に拡がって、豊かな精神世界を構成しているというのが、いちばん実態に近いようである。(6)

「食罷一覺睡」と「游罷睡一覺」の数量詞「一覺」は睡眠の始まりと終わりをはっきり意識する言葉であり、睡眠の質の良さを強調する。睡眠の質の良さが茶の味を一層美味しく感じさせる。よく眠ったあとの「兩甌茶」と「茶一甌」の

美味しさが想像できる。白居易にとって睡眠の幸福の延長線上に茶があり、茶の存在はその幸福感をさらに深めるものである。そして、寝起きの飲茶から得られる生理的な満足感は普遍的であり、他人からも共感されやすい。寝起きの「一碗茶」は茶の味よりも、茶を飲んだあと身体の隅々まで快適な感覚に潤わされた精神状態を一番伝えたいのではなかろうか。

次に、酒の酔いを醒ます茶と酒後の喉の渇きを癒す「一碗茶」について。酒と茶を飲む時の情景を描く「春盡日（春の終わる日に）」〔三五八一〕を挙げる。

芳景銷殘暑氣生　芳景孝殘して暑気生ず
感時思事坐含情　時に感じ事を思ひ坐して情を含む
無人開口共誰語　人なし口を開いて誰と共にか語らん
有酒回頭還自傾　酒あり頭を回らして還た自ら傾く
醉對數叢紅芍藥　酔うては数叢の紅芍薬に対し
渴嘗一盌綠昌明　渴しては一盌の緑昌明を嘗む
春歸似遣鶯留語　春帰りて鶯をして語を留めしむるに
好住林園三兩聲　好く林園に住すること三両聲

春の景色は少しずつ消え、初夏の暑さを感じるようになった。春の季節や風を喜んだり、悲しんだり気持ちはただのむなしさに変わった。ここは喋る相手もなく、誰と語り合おうと言うのだろうか、酒があるから振り返っ

て自ら酌でもう。

酔いながら目の前の数株の紅の芍薬を眺め、喉が渇くと一杯の緑昌明を賞味する。春は帰っていったが鶯に伝言させたのだろうか、「ごきげんよう」と二三回度鳴声が聴こえてくる。

季節は晩春から初夏へと移り変わろうとしている。深紅の芍薬をめでる、自分のペースで酒を飲む、鶯の鳴声に時々耳を傾ける、大好きな蜀茶の緑昌明を飲む。ゆったりと流れている時間、静かな環境、これらはすべて「一碗」の茶を楽しむための舞台となる。ほろ酔いしながら芍薬を観賞しているということは酒を何杯も飲んだ後であろう。けれども、「渇嘗一碗緑昌明」とは、酒の杯を重ねても茶は一杯目が強調されている。一番美味しく感じる一杯目である。ほろ酔い状態で頂く茶だったので、自分の手によるものではなく、使用人が煎じてくれたものであろう。これに関しては、「桃根（侍女の名）酒渇を知り、晩に送る一甌の茶」（「營閑事」〔三一一六〕）が好例となる。また、「池上逐涼二首」〔三二六五〕に、「棹は禿頭の奴子をして撥せしめ、茶は纖手の侍児をして煎せしむ」という描写がある。茶を煎じてもらう時は、自分で煎じる過程を楽しむ時よりも一杯目の茶の美味しさが身体中に沁みわたっていく感触を強く、ストレートに感じることができる。従って、茶は三杯か五杯ではなく、一杯でなければならない理由はここにある。

最後に、茶の数量詞数が一、二以外の例について。次の「山路偶興（山道を歩く時感じたこと）」〔〇三五一〕では「数甌」が使われており、白居易の詩の中でただ一つの例外である。

筋力未全衰、僕馬不至弱　　筋力未だ全く衰へず、僕馬至つて弱からず。
又多山水趣、心賞非寂寞　　又多山水の趣多く、心賞寂寞に非ず。

捫蘿上煙嶺、踏石穿雲壑	蘿を捫つて煙嶺に上がり、石を蹋んで雲壑を穿つ。
谷鳥晩仍啼、洞花秋不落	谷鳥晩に仍は啼き、洞花秋にも落ちず。
提籠復携榼、遇勝時停泊	籠を提げ復た榼を携え、勝に遇うて時に停泊す。
泉憩茶數甌、嵐行酒一酌	泉に憩ふ茶数甌、嵐に行く酒一酌。
獨吟還獨嘯、此興殊未惡	獨り吟じ還獨り嘯、此興殊に未だ悪しからず。
假便在城時、終年有何樂	假使城に在る時も、終年何の楽有らん。

体力はまだ完全に衰えていない、下僕も馬もまだ多少元気がある。加えて山水の景色はなかなか趣があり、心から楽しんでいるので寂しくない。藤の蔓を引っ張り、霧のかかっている峰に登り、岩を踏み、雲の中の谷を通る。ヤツガシラが夕方まで鳴き続け、洞窟の花は秋になっても散ることがない。

篭を提げ、盃の用意もあり、景色のすばらしいところに来ると足を止める。泉のそばで休憩し、茶を数杯飲み、山風に当たるので、酒で一服する。一人で詩を吟じ、一人で高い声を出して叫ぶ。この楽しみ方はなかなか悪くはない。もしずっと町の中に居れば、一年中何の楽しみがあろうか。

この詩の中の飲茶はほかのものと異なり、野点てである。詩人はきれいな山水風景を求め、山の深いところまで来た。泉のそばで休憩をとり、泉の水で茶を沸かす。出来上がると茶を一気に数杯飲んでしまった。自分の住居にいる時の「一碗茶」と比べれば、飲茶のコンディションの違いは二つある。一つは場所が幽寂で仙境のような山の中にいること。もう一つは体力がまだ完全に衰えていないとはいえ、かなりきつい山道を歩いた後であること。こういう時は思わず数杯

も飲んでしまったという結果になっていた。茶は数杯になっていたが、皎然のように悟りあるいは「昇仙」の境地を求めていたわけではない。

「一碗茶」（或は文字が違っても同義語）は白居易の茶詩のなかですっかり熟語として定着しており、その内容は以下の二点にまとめられる。

（1）「一碗茶」は読書・詩作と対して書かれる場合、読書・詩作と同じく一人の士大夫として修養に努め、理性を持って思索する時間を持つことを意味する。

（2）「一碗茶」は飲酒や睡眠、食事のあとの快適な生活習慣と生理的な満足感の大事な要素として登場する。「一碗茶」を「七碗茶」になるまで重ねないことに意味があり、白居易は飲茶によって、皎然や盧仝のように、完全に俗世を超越しようとする意思を持っていなかった。

二、邸宅での飲茶

飲茶の性質と特徴を見つめるため、飲茶の主体（詩人や僧侶など）や状態、手順などを分析しなければならない。もちろん飲茶の場所も大事な要素の一つとして注目しなければならないと思われる。初唐から白居易の生きた中唐まで茶詩は二百首を数えられる。しかし白居易の詩を除けば、茶詩に見られる飲茶活動の場所は、ほとんど寺、野外、隠居あるいは左遷先の棲み処などである。普通の邸宅での飲茶はわずか数首しか存在しない。例えば、女性詩人鮑君徽の「東亭茶宴」（『全』七）は宮中の庭園での飲茶であり、「惜花吟」（『全』七）は閨房での飲茶である。晩唐飲茶の場面は少し

バリエーションが増えたが、飲茶は静寂な環境で行われることであり、世俗から離れているイメージ自体は変わらない。白居易と同時代の詩人で、比較的に多くの茶詩が残っている人は賈島、張籍、姚合である。白居易の飲茶場所との違いを説明するため、姚合の茶詩を取り上げてみよう。

（1）姚合の場合

姚合は白居易より五歳若く、白居易より三年早く亡くなっている。官位は武功県主簿から監察御史、杭州刺史、秘書監などについていた。賈島との交遊があり、詩風も近いことから、姚賈と称されている。一方、姚合は白居易とも直接の交遊があり、二人の贈答詩や和詩が残っている。姚合の詩の題材は範囲が狭く、平淡で日常性のある詩風は白居易と共通しているといわれている。(7)

姚合の茶詩は全部で十二首ある（賈島は十二首、張籍は九首）。白居易の茶詩の数より格段に少なく、内容は大まかに三つに分けられる。①寺の僧侶の暮らしを描く詩。②山中に隠居する友人、あるいは山中に赴く友人に贈る詩。③自宅ではない野外や園林での煎茶。それぞれ一首ずつ選んで論述したい。

まず、僧の暮らしを描く詩として「寄元緒上人（元緒上人に届ける）」。（『全』四九七）を挙げよう。

石窗紫蘚墻、此世此清涼　　石窓　紫蘚の墻、此の世に此の清涼
研露題詩潔、消冰煮茗香　　露を研して　詩を題すること潔く、氷を消し茗を煮て香る
閑雲春影薄、孤磬夜聲長　　閑雲　春影薄く、孤磬　夜声長し

何計休為吏、從師老草堂　　何の計か 休して吏と為り、師に従いて草堂に老いん

石の窓や苔のある壁、この世の中にこれほどの静けさ。露で墨をすり清らかな詩を書き、氷を融かして香りのいい茶を煎じる。雲はゆったりと流れ、春の光も薄く、磬の音が静かな夜に長く響く。どうすれば官職から解放されて、師に従い、老いるまでこの草堂で暮らすことができるだろうか。

元緒上人の住居環境と暮らしぶりに対しての憧れを描いている。「紫蘚」や「閑雲」、「孤磬」は静かな世界と悠長な時間の流れを表わす。「露」と「氷」は清らかさを強調し、俗塵のない幽寂な環境を褒め称える。茶禅一味という考え方から、当時の僧に贈る詩は、茶を煎じることは欠かせない設定であった。(8)

次は隠居暮らしの友人に贈る詩「宿友人山居（友人の山居に泊まる）」を挙げる（『文苑英華』巻二一七）。

偶向山中覓紫芝　　偶〻 山中に紫芝を覓む
山人勾引住多時　　山人に勾引せられて住むこと多時
摘花浸酒春愁盡　　花を摘みて酒に浸し 春愁尽く
燒竹煎茶夜臥遲　　竹を焼き茶を煎じ 夜臥遅し
泉落林梢多碎滴　　泉 林梢に落ちて 砕滴多し
松生澗底足旁枝　　松 澗底に生じ 旁枝足る
明朝卻欲歸城市　　明朝却りて欲す 城市に帰らんと

問我回期自不知　　我れに回期を問うも 自ら知らず

たまたま山の中に仙薬を採りに来たら、山中に住んでいる友人に引き留められ何日も逗留している。花びらを摘み酒に浸け（それを飲めば）春の憂いも消え、乾いた竹を薪にして茶を煎じ、（飲みながら語らい）夜床につくのが遅くなる。

泉の水が（上から）落ちて林の梢で散って水滴になり、谷の底に生えている松の樹の枝は多い。明日朝いよいよ町に帰ろうと思い、次に来る予定を聞かれてもわからないと答えた。

山中に隠居している友人の家に滞在して、その自然環境を愛でている。崖の高いところから滝が落ち、深い谷の石の下から鬱々とした松林が生えている。勿論、野の花やキクラゲなどの山菜、竹林も随所に見られ、まるで桃源郷のようだ。こんな仙境のような環境の中で、春の花の香りする酒を飲み、竹を燃やして茶を煎じる。夜はなかなか床に就きたくないということから、茶を何杯も賞味して、すっかり眠くなくなっているということであろう。詩を贈る相手の隠居生活を褒め称え、俗世から遠く離れる飲茶を描写している。

最後に姚合自身の野外での飲茶風景を詠う詩「杏溪十首　杏水」（『全』四九九）を紹介する。

不與江水接、自出林中央　　江水と接せず、自（おのずか）ら林中央より出で
穿花復遠水、一山聞杏香　　花を穿ちて復た遠水、一山　杏香を聞く
我來持茗甌、日屢此來嘗　　我れ来たるに茗甌を持ち、日に屢〻此に来たりて嘗む

大きい川に通じているというわけでもなく、林の中から自然と渓流として流れ出ている。杏の花が咲き乱れる林をくぐりぬけさらに遠くへ、杏の花の香りは山の至る所に漂う。わたしは茶と茶碗を持参し、日頃たびたびここで（茶と渓流の水）を味わう。

野外で渓流の水で煎茶する風流を詠じている。「杏花水」は詩の中で春の美しい野外景色を形容する言葉であり、ここでは「杏花香」も加えられ、渓流の水のイメージをさらに重層的に美化している。

以上取り上げられている三首の飲茶場所は隠居している友人の棲み処や親交のある僧侶の僧房、季節の移り変わる表情が美しい野外である。これらの場所は姚合がわざわざ選んだものではなく、当時の飲茶のイメージによく合う舞台であり、普通のものである。例を挙げれば、戴叔倫の「與友人過山寺」（『全』二七三）、韋応物の「簡寂觀西澗瀑布下作」（『全』一九二）、孟郊の「題韋承總吳王故城下幽居」（『全』三七六）、劉禹錫の「西山蘭若試茶歌」（『全』三五六）、賈島の「雨中懷友人」（『全』五七二）温庭筠の「西陵道士茶歌」（『全』五七七）などがある。

（2）白居易の邸宅での飲茶

白居易の茶詩は約七十首あり、その中で飲茶する場所に言及したもの、或は推測できるものは五十首を超える。この五十余りの中で、自分の住居としての官邸或は自分の家が飲茶の場所となっているのが四十四首もある。これは白居易茶詩の一番大きい特徴である。

どういう場所でどういう状態で飲茶するかを見れば、その目的や内容、性質も見えてくる。白居易の茶詩にある飲茶

場所のほとんどは私的空間である自宅であることを分析すれば、飲茶は白居易にとってどういう意味を持っている行為であるかはわかるはずである。

白居易の飲茶詩はほとんどが江州に左遷させられたあとに作られたものである。まず、白居易が江州に滞在した時期の茶との関わり方からみてみよう。

元和十二年、白居易は江州に来てから二年後、廬山に草堂を建てた。住居とするものではないが、白居易が自ら選んだ理想的な場所である。「香爐峰下新置草堂即事詠懐題於石上（香爐峰の麓に新たに草堂を建てて、思うことを石に記す）」〔〇三〇三〕という詩によるとそこは次のような場所である。

香爐峯北面、遺愛寺西偏　　香爐峯の北面、遺愛寺の西偏。
白石何鑿鑿、清流亦潺潺　　白石何ぞ鑿鑿たる、清流亦潺潺たり。
有松數十株、有竹千余竿　　松有り数十株、竹有り千餘竿。
（中略）
如獲終老地、忽乎不知還　　終老の地を獲たるが如く、忽乎として還るを知らず。
架巖結茅宇、斫壑開茶園　　巖に架して茅宇を結び、壑を斫りて茶園を開く。
何以洗我耳、屋頭落飛泉　　何を以てか我が耳を洗ふ、屋頭に落泉飛ぶ。
何以净我眼、砌下生白蓮　　何を以てか我が眼を洗ふ、砌下に白蓮生ず。
（後略）

香爐峰の北側、遺愛寺の西の外れ。白い石は実に鮮やか、澄んだ渓流はさらさらと。松の樹は数十本あり、竹

林の竹も千にあまりほどある。……
終の棲家を得たかのように、徘徊して帰ることを忘れる。岩に立て掛けて草葺きの小屋を作り、谷を切り開いて茶園を作る。
耳を清めるものは屋根の上から飛び散る滝の水、目を洗ってくれるのはみぎりにある白い蓮の花……

建てた草堂は幽遠な自然環境にあり、白い岩や渓流、松の樹、竹林、滝、池の蓮の花などが清らかで俗塵のない世界を作っている。もちろん草堂という建物も安住、享楽のためではなく、俗界から離れるための住居であり、隠居の棲み処になる場所である。詩人はここで茶園を作り、自ら茶摘みして煎茶することになるだろう。この場所での飲茶は（もし詩の中でその描写があれば）前文で挙げた姚合たちの茶詩の飲茶と同じイメージになるだろう。

続けて廬山草堂に関しての詩をもう一首とりあげてみよう。「重題（二）」〔〇九七七〕である。

長松樹下小溪頭　長松樹下小渓の頭
斑鹿胎巾白布裘　斑鹿胎の巾白布裘
藥圃茶園為產業　藥圃茶園產業と為し
野麋林鶴是交游　野麋林鶴是れ交遊
雲生澗戸衣裳濕　雲は澗戸に生じて衣裳潤ひ
嵐隱山廚火燭幽　嵐は山厨を隠して火燭幽なり
最愛一泉新引得　最も愛す一泉新に引き得て

清冷屈曲遶階流　清冷屈曲廻りて流るるを

年月のある松の樹の下、渓流のほとり、いつも斑鹿胎の頭巾に白い布の服。薬や茶畑の世話を仕事とし、野生のシカや鶴交遊の相手にしている。

雲が湧く谷の家では服が湿り、山の嵐の中の台所は、蝋燭の光も弱弱しい。もっとも気に入っているのが新しく引いてきた泉の清流、水が冷たくぐねぐねと階の下を廻る。

前文の草堂詩と同じ様に、やはり松の樹や泉、渓流が景色の中にあった。さらに、鹿や鶴などの野生の生き物の姿も加えられている。この環境の中で、野人の身なりで野生の鹿や鶴と戯れている状況であれば、もう自然と完全に一体化し、隠居生活を送っている山人になっていると言っても過言ではない。ところで、ここで注意を払わないといけない点は、茶との付き合い方である。上掲の姚合達の飲茶詩には、静かで清らかな自然環境の中で煎茶に興じる詩人たちの姿があった。飲茶の描写によって、飲茶詩は俗界を超越する孤高な詩人たちの志を描いていてきた。しかし、白居易の二首の草堂詩は違っている。草堂は隠居のような環境が整っているが、その中で飲茶する情景はない。白居易はそこで茶園を切り開き、薬畑も作り、毎日いそいそとそれらを栽培するのみである。飲茶の描写がなかった理由を考えると、次の二点が挙げられる。

一つは草堂を建てたのが左遷によるタメージと傷を癒すためだったことである。白居易には、草堂に隠居し、俗界とのつながりを断ち切り、飲茶によって草堂を完全に茶禅一味の世界にするつもりはもともとなかったのである。これは、後に形成されていく白居易の「中隠」思想に直結しているだろう。

もう一つは飲茶の従来のイメージと異なり、快適で優雅さが備わっている住居での茶の楽しみ方を飲茶の新しい側面として茶詩に表現したかったからである。これは白居易の飲茶のスタイルであり、後の白居易の飲茶詩によって立証されている。

そして、白居易のこの時期の茶詩について、もうひとつ注目すべき点がある。それは「或吟詩一章、或飲茶一甌」という形の詩句が主張する生き方である。この点は五首の例を前章ですべて示したが、ここでは住居の中で、日常生活の一部としての読書と飲茶を描く詩「詠意（気持ちを詠う）」〔〇二九八〕全体を挙げてみる。

常聞南華經、巧勞智憂愁　　常て聞く南華の経、巧は労し智は憂愁す
不如無能者、飽食但遨游　　如かず無能の者、飽食して但だ遨游するに
平生愛慕道、今日近此流　　生平道を愛慕し、今日此の流に近し
自來潯陽郡、四序忽已周　　潯陽郡に来たりて自り、四序忽ち已に周る
不分物黑白、但與時沉浮　　分かたず物の黒白、但だ時と沈浮す
朝餐夕安寢、用是為身謀　　朝に餐らい夕に安寝し、是を用て身の為に謀る
此外即閑放、時尋山水幽　　此の外は即ち閑放、時に山水の幽を尋ぬ
春游慧遠寺、秋上庾公樓　　春は慧遠の寺に游び、秋は庾公が楼に上る
或吟詩一章、或飲茶一甌　　或いは詩一章を吟じ、或いは茶一甌を飲む
身心一無系、浩浩如虛舟　　身心一も系がるる無く、浩浩として虛舟の如し

（または「或いは吟ず詩一章、或いは飲む茶一甌」）

富貴亦有苦、苦在心危憂　　富貴も亦た苦有り、苦は心の危憂に在り
貧賤亦有樂、樂在身自由　　貧賤も亦た楽有り、楽は身の自由に在り

南華経の説法をよく聞くが、よく働く者と智慧のある者は憂いが多い。無能である方がまだましであり、飽食してただ遊び歩くだけでいい。普段から道教への憧れがあり、今はやっとそれに近づくことができた。潯陽郡に着任してから、あっという間に四季が一周入れ替わった。

物事の白黒を分別せずに、ただ時に身を任せるだけであった。朝は起きて食事し、夜はぐっすり眠る、これはすべて健康のためである。そのほか、自由自在に行動し、時々景色のきれいなところを散策する。春は慧遠寺へ出かけ、秋は庾公楼に登る。

或いは詩を一首吟じ、或いは茶を一杯味わう。身体も心も束縛するものがなく、広々として何にも載せてない舟のようだ。富や身分があっても困る時があり、ずっと明日のことを心配するのが大変だ。反して貧しく身分も低い人々にも楽しさがあり、それは自由を満喫することである。

元和十年、白居易は江州に貶謫され、その地で一年を過ごした後この詩を書いた。一生の中でもっとも大きい挫折を経験し、彼は毎日の食事や睡眠、自然山水の散策、古跡名所の見学などを淡々とこなしながら現実と向き合うように努めている。注目すべきは「生平愛慕道、今日近此流。」の句である。俗界に身を置きながら、道教や仏教の考え方に対して理解を深めることができた。その上、「身心無一系、浩浩如虚舟」と煩悩や不安から解放され、時々読書し、また時々飲茶することによって、心身のバランスを保っているのである。

類似の表現は「重題（その三）」〔〇九七九〕の結句「心泰身寧是歸処、故郷可獨在長安（心が穏やかで身も安全である場所に帰るべき、故郷は長安しかないということはない）」にもあった。「（故郷独り長安に在るのみなる可けんや）というのは、故郷の最たるものは長安だという意識を前提にした表現です。」[9]と下定雅弘氏が断定する通りである。この長安に帰れないストレスを抑え、「心泰身寧」の状態を維持するには、やはり読書と飲茶が必要である。読書は孟子の所謂「独善」であり、個人の修養や精進に努める行為である。そして、飲茶は当時の脱俗、幽寂のイメージに基づき「同流合汚」（世俗に同化する）への拒絶を示し、現実と距離を置くが、隠居はしない意思を発信する。飲茶を読書と同時に詠う茶詩は白居易のもの以外に見当たらない。偶にあるものは「搗茶書院靜，講易藥堂春（静かな書院で茶を搗く音が響き、春の薬堂で易を談ずる）」（「贈李太守」于鵠『全』三一〇）や「讀易分高燭，煎茶取折冰（高燭を分けて易を読み、折ったつららを取り煎茶に使う）」（「山中寒夜呈進士許棠」曹松『全』七一六）などの隠棲生活基調の飲茶と「読易」である。白居易だけは「或いは…、或いは…。」の句を好んで使い、自らの立場をアピールした。したがって、飲茶の場所は野外や隠居の場所ではなく、日常生活している住居でなければならなかったのである。

元和十五年、白居易は朝廷復帰を果たし、長安や洛陽で安住できる邸宅を手に入れた。白居易が自宅で飲茶する生活を茶詩にし、一番沢山書いた時期であつた。この時期の白居易の茶の捉え方はどういうものであっただろうか。

それを説明する前に、当時の茶の参考資料としてまず白居易の生涯の友、元稹の茶詩を紹介する。元稹は六首の茶詩を残しており、おもに自然風景を詠う送別詩である。その中で形が変わっているが、面白いものを一首とりあげてみる。タイトルは「茶　一字至七字詩　（以題為韻同王起諸公送白居易分司東都作）（茶・一字から七字までの詩。題の茶の韻を用いて王起諸公と一緒に白居易が分司東都として赴任するのに贈る）」（『全』四二三）である。

茶

香葉、嫩芽
慕詩客、愛僧家
碾雕白玉、羅織紅紗
銚煎黄蕊色、碗轉麴塵花
夜後邀陪明月、晨前命對朝霞
洗盡古今人不倦、將知醉後豈敢誇

お茶は葉が香り、芽も柔らかい。詩人たちに憧れ、僧侶たちを愛する。茶を白玉で薬研で挽き、また絹のふるいにかける。釜の中で黄緑色の茶の粉末を煎じ、茶碗に入れると、黄色い泡沫がグルグル廻る。
夜の明月を眺める時飲み、朝起きてやはりまず茶を入れる。いにしえから人々の疲れを洗い流し、酒酔いの後、お茶の世話にならないなんて言えない。

変わった茶詩というのはまず形が面白い。一字から七字まで重ねていく書き方で、形は塔の形と同じようになるところから、「宝塔詩」と名付けられている。そして二句ずつの対句もきちんとされている。以上に挙例した茶詩と異なり、美辞麗句で書かれている茶詩である。まずは茶の葉の香りと季節感、それから茶の風流を愛する人、茶道具の華美さ、茶の湯の美しさ、茶のある優雅な日常風景、最後に生活に欠かせない茶の効用という内容で、詩句の文字数が少しずつ長くなっていく。美辞麗句で綴られている茶のイメージは、心と茶の一味・一体を求める「禅茶」と完全に異なる茶の

もうひとつの顔である。当時はとくに宮中や身分の高い貴族、官僚の間に華美で贅沢な飲茶ブームもあった。

この元稹の茶詩とは対照的に、白居易の飲茶は邸宅という私的空間の中で日々の日常生活に密着するものである。前文の寝起きや酒後の「一碗茶」だけではなく、様々な飲茶シーンが白居易の茶詩には描かれている。見舞いの友人と茶を飲みながら歓談し、詩を吟じる「病假中龐少尹携魚酒相過（病休の時龐少尹は魚と酒を携え見舞いに来た）」〔二六四三〕を見よう。

宦情牢落年將暮　宦情牢落として年将に暮れんとす
病假聯綿日漸深　病假聯綿として日漸く深し
被老相催雖白首　老いに相催されて白首なりと雖も
與春無分未甘心　春と分なくして未だ甘心せず
閑停茶椀從容語　閑に茶碗を停めて従容として語り
醉把花枝取次吟　酔うて花枝を把りて取次に吟ず
勞動故人龐閣老　労働す故人龐閣老
提魚携酒遠相尋　魚を提げ酒を携へて遠く相尋ぬるを

病気で休みが続く日々は長くなった。老いに追われて頭が白くなったとは言え、もう春が来ることと関係ないなんて思いたくない。

茶を飲むのを止めて、ゆったりと語り合い、ほろ酔いながら花の枝を手に取って順番に詩を吟じる。古い友人

龐閣老に面倒をかけ、魚や酒を携えて見舞いに来てもらった。

年を取り、やる気もあんまりないので、長い病休をとっているが、春を楽しむ気持ちはまだ誰にも負けていない。古い友人と酒を飲み、語らい、また茶を飲み、詩を吟じる。春を優雅に楽しむ情景には、茶が友情や酒、詩と同じく欠かせない要素になっている。

ユニークな場所での飲茶を描いたのは次の「池上逐涼二首（池の上で涼む）（二）」〔三二六五〕である。

窗間睡足休高枕　窓間睡足りて高枕を休め
水畔閑來上小船　水畔閑に来たりて小船に上がる
棹遣禿頭奴子撥　棹は禿頭の奴子をして撥せしめ
茶教纖手侍兒煎　茶は纖手の侍児をして煎せしむ
門前便是紅塵地　門前は便ち是れ紅塵の地
林外無非赤日天　林外は赤日の天に非ざる無し
誰信好風清簟上　誰か信ぜん好風清簟の上
更無一事但翛然　更に一事無くして但翛然

窓の開いた部屋でたっぷり寝て枕から離れ、することもなく池の畔で小舟に乗った。舟を漕ぐのは毛の少ない下僕に任せ、茶を煎じるのは指の細い侍女にやらせる。

家から出れば喧騒の世界、林の外は炎天下。水の澄んだこの池の上にとてもいい風が吹き、何にもすることはなくずっとボーっとしていられる。

昼寝の後はまた時間がたっぷりある。舟に乗り、涼しい風の中で茶が出来上がるのを待つだけ。快適な夏の昼下がりが絵のように目の前に浮かぶ。川の旅の舟で煎茶することは時々あるかもしれないが、邸宅の庭の池で舟を浮かべ、さらに煎茶道具を一式持ち込み茶を点てることは、白居易以外に誰かが行うだろうか。「履道新居二十韻」〔二三七九〕の中に、やはり池の上の小舟で茶を点てる情景を描く詩句「移榻臨平岸、携茶上小舟（寝床を岸の平らなところに移し、茶を携えて小舟に乗る）」が見られる。小舟の上で茶を点てるのは白居易にとって日常的なことであったがわかる。

次の詩「酬夢得秋夕不寐見寄（劉夢得が送ってくれた秋の夜に眠らない詩に返す）」〔二二七〇三〕は茶を煎じてもらうシーンを詠じている。

碧簟絳紗帳、夜涼風景清　碧簟絳紗の帳、夜涼しうして風景清し。
病聞和薬気、渇聴碾茶聲　病んで薬を和する気を聞き、渇して茶を伝する声を聴く
露竹偷燈影、煙松護明月　露竹は燈影を偸み、煙松は月明を護る。
何言千里隔、秋思一時生　何ぞ言はん千里隔たると、秋思は一時に生ず。

青い席に蚊帳が降ろされ、夜は涼しく景色も清々しい。病にかかり、薬を煎じるにおいが漂い、喉が渇いて茶餅を挽く音を聴きながら茶を待つ。

露のかかる竹林はひっそりと燈火の影に潜み、霧の中松の樹の上に明月が夜空に昇っている。わたしとあなたの間に千里の距離もあるなんて言わないで欲しい、同じ秋の夜に同じ思いでいるから

秋の夜に飲茶する様子を書いた詩である。きれいな月と清々しい風のある秋だが、病で寝床に伏し、嗅覚と聴覚薬の匂いや茶を挽く音を感じている。白居易は茶を飲む前に、「渇」という字をよく茶詩の中で多用する。例えば、「病來肺渇覺茶香」、「渇飲毗陵遠到茶」、「酒渇春深一碗茶」などで、茶は「渇」と結びつくことによってより日常性を持たされ、より身近な存在となっていった。

以上、長安や洛陽の邸宅での飲茶を詠う茶詩を紹介した。白居易の詩の日常性は度々指摘されてきたが、飲茶詩の日常性は茶詩の進化に於いても茶文化の発展に於いても大きな意味を持っていることは明らかである。

三、まとめ

茶詩が書かれ始めたのは白居易が生まれる前数十年という短い時間だが、飲茶がすでに仏教や道教などからの影響によって隠居のイメージをもっており、清らかな雰囲気のものとなっていた。そして白居易の茶詩に描かれている飲茶は三つのキーワードからその斬新な側面を窺うことができる。

一つめは白居易は「或吟詩一章、或飲茶一甌。」の語句を使い、初めて読書・詩作を飲茶に並列させた。読書・詩作が士大夫の日常の一部であり、白居易は士大夫でありながら茶の清らかなイメージを持って身を守り、俗世に同化されないことの意思表明である。これは左遷先の地江州で作った茶詩の中で決まった表現として何度も見受けられた。(10)

二つめは「一碗茶」の多用である。睡眠や食事、飲酒と共に「一碗茶」は登場する。「一碗茶」は盧仝の「七碗茶」とは対照的で、俗界の超越や俗界との対立を避け、凡人として心身共に茶の美しさと美味しさを享受しているものである。

三つめは住居での飲茶である。自分の邸宅という私的空間は飲茶の日常性を決め、その日常性を背景として飲茶はいろんな行為、例えば睡眠や飲酒、花見、月見、友人との付き合いをより円満な状態に保ち、白居易の生活を優雅で心が穏やかなものにした。

以上を要するに、「一碗茶」の飲茶スタイルは白居易の「独善」「中隠」思想の表れであり、邸宅での飲茶を描く日常性のある茶詩は飲茶の社会的、文化的なイメージ（禅、昇仙、隠棲など）を塗り替え、飲茶により広い発展空間を提供した。それ以後の飲茶は特殊な環境で決まった形式を持ち、ストイックな世界を究める（日本の「茶道」のように）ことなく、より普遍性、社会性のある文化として詩の中で、多様に詠われ続けるようになり、中国の飲茶文化の源流と礎になったと言えよう。そこに果たした白居易茶詩の功績はまことに大きい。

［注］

（1）「飲茶」は喫茶の意味で中国語の詩文の中で使われている。

（2）『中国学志』咸号（三十一号、大阪市立大学中国学会、二〇一六年）、一-十八頁。

（3）本稿にある白居易詩原文はすべて那波本『白氏文集』による。訓読は佐久節訳註『白楽天全詩集』（日本図書センター、一九八九年）による。

（4）本稿にある白居易詩の番号は花房英樹氏が定めた番号による。

（5）白居易詩の現代語訳は川合康三氏の『白楽天詩選』を参考にした。
（6）『白居易研究・閑適の詩想』、一五〇頁。
（7）『白居易の幸福世界』「第六章　白居易への共鳴 ―姚合の詩―」。
（8）この詩は『全唐詩』巻四九六では「送別友人」の題で、本文も若干異同がある。内容から『文苑英華』の題を取り、本文もこれに従う。
（9）『白楽天の愉悦―生きる叡智の輝き』、七一頁。
（10）「或飲一甌茗、或吟兩句詩。」（「首夏病間」）、「或吟詩一章、或飲茶一甌。」（「詠意」）、「起嘗一甌茗、行讀一卷書。」（「官舎」）など。

［参考文献］

布目潮渢『緑芽十片――歴史にみる中国の喫茶文化』（岩波書店、一九八九年）
趙方任　『唐宋茶詩輯注』（シンクシステム開発、二〇〇四年）
埋田重夫『白居易研究・閑適の詩想』（汲古書院、二〇〇六年）
下定雅弘『白楽天の愉悦――生きる叡智の輝き』（勉誠出版、二〇〇六年）
中木愛　『白居易の幸福世界』（勉誠出版、二〇一五年）
川合康三『白楽天――官と隠のはざまで』（岩波新書、二〇一〇年）
趙方任　『茶詩に見える中国茶文化の変遷』（シンクシステム開発、二〇〇四年）
朱自振編『中國茶葉歴史資料選輯』（北京農業出版社、一九八一年）